

『釋淨土群疑論』の日本における受容の形体について、凡夫の往生する浄土が、三界撰か不撰かという点に絞って、日本ではいかに受容してきたかについて考察してみたい。

『釋淨土群疑論』では、凡夫の往生する浄土が三界撰なのか不撰なのか論じられている。この問題は、無漏なる如来の浄土へ有漏なる凡夫が往生するという相互に矛盾した者が同一の場所に住することから発起する。日本においては古くは、良遍作といわれる『群疑論見聞』、道忠の『釋淨土群疑論探要記』、宣明の『釋淨土群疑論口義』等の末書類に引用されている。近年における研究では、望月信亨博士が『中国浄土教理史』の中において、「之を要するに西方浄土は佛の所変についていへば無漏他受用の浄土であり、凡夫自心の所変についていへば有漏土の土で、即ち欲界二界の撰とせなければならぬ」として、凡夫所變の浄土は三界の撰であるという説をとられている。また神子上恵龍博士は、『弥陀身土思想の展開』の中で『釋淨土群疑論』の大要を和訳されながら、最終的に、第一積は有漏の浄土はこれ欲界二界の撰とする。即ち有漏心は三界をも離れぬものなれば三界の撰というべきである。三界の中、彼の浄土は欲色二界の撰である。(中略)第二積は、有漏所變の浄土なりとは云へ、三界の撰と為すことはできないとする。何者、有漏の名は寛く、三界の名は狭い、經に浄土に生ずれば五趣無しと云ってある。故に有漏とは名くべきも、三界の撰と云ふことはできないと見るのである。此の如く二積ある中、初積をもつて正としてゐる」として、凡夫所變の浄土は三界撰の説を正しいとされている。先学の先生は、皆初積すなわち三界撰の立場を『釋淨土群疑論』の立場とされている。それに対して金子寛哉氏は、『平成二十九年度 教学高塔講習会 本講 中国浄土教思想史の展開』の中で、「第一に「浄土観」について見ると、西方浄土は、法性、自受用、他受用、変化の四土に通ずるところとする。しかも仏心は無漏清浄であるから、その仏心によって変現されるところの浄土は、欲界、色界、無色界等の三界を超越したところであることを述べている。またその三界を超越した高い次元の浄土へも阿弥陀仏の本願力を増上縁として、凡夫も報土たる浄土へ往生することができるのである。しかし、その報土は如来の立場を中心に考えれば、無漏清浄の浄土であるが、凡夫の往生するところは、凡夫が自心によって変現したところの浄土であって、これを受用するという。したがって、この点から考えると、凡夫の往生するところは、有漏の浄土ということになる。これは、懷感が主として用いた法相唯識の立場に立って説明する場合、抜け出ることのできない教義上の限界を示しているもので、この点をめぐって、極楽浄土を三界に撰すべきか、それとも三界を超越した存在とすべきかという、詳細な議論が展開されている。これに対する懷感の結論は現在『群疑論』の文からすれば、三界の中であるとしているようにもとれる。しかし、懷感の立場そのものからすれば、三界を超越したものとすべきかと思う。古くからの問題点である。」と説かれ、懷感の立場は、「三界撰にある」を第一として、「三界不撰」は金子氏の希望的結論として提起されている。以下、日本に『釋淨土群疑論』を受容して以来の歴史的な道筋を追いながら、第二の三界不撰の立場を肯定できないのかを考察してみたいと思う。

『釋淨土群疑論』 「浄土三界撰不撰」 「日本の受容」